

人の心を動かす音楽家は 透明の楽器で音色を奏でる

写真家であれ小説家であれ、芸術家であれ、表現者の作品からは、その人となりが見て取れる。柔らかく、甘くコクのある音色を奏でるチェリスト、溝口肇も例外ではない。物腰が柔らかく、穏やかに流れるように話す。彼がチェロに似たのか、それとも、チェロが彼に似たのか。発する言葉に旋律を感じたのは、決して誇張ではない。それはひよっとすると「本当は、歌をやりたかった」と教えてもらったせいかもしれない。「歌は、言葉でストリートに思いを伝えることができる」と彼は言う。しかし「旋律」という言葉を持たぬメッセジは、時として聴く者の心を猛烈に震わせる。彼はそのカラクリを、「音楽は、奏でる人そのものだから」と解き明かす。

「先日、ギターリストの押尾コータロさんと共演する機会があったんです。彼はギターを弾いているんですけど、それを感じさせないんです。ギターが奏でる音楽が彼自身なんです。僕もチェロは見えないほうがいい。チェロが透明になって、僕をストリートに出すことができたなら、僕の勝ち、と思っています。」

自らの深遠を見つめ、えぐる 音楽は、「心の覚醒」である

チェロとの付き合いは、かれこれ30年ほどになる。生まれついでの子エリストかと思いきや、最初に弾いたのはピアノだった。「3歳でピアノを習い始めたんです。チェロは11歳の時。母に『他の楽器をやりなさい』と言われて、弦楽器の教室に連れて行かれたんですよ。そこで先生にチェロを勧められて、自動的にチェリストの道へ(笑)」。触れたことのない楽器を夢中で弾き気がつけばチェロの世界に引き込まれ

だいたいが恥ずかしい過去ですから(笑)」と冗談めかして言う。

今の彼にとって、音楽は「心の覚醒」だという。「演奏するにしても作曲するにしても、自分の知らない部分を発見することができませんから。そんなプロセスを経て生まれ、奏でられる音楽だからこそ、聴き手の心に訴えるのだろう。彼は嘖みしめるように言う。

「音楽に心を動かされた時、人は何に感動しているのかというと、作者の心の中にあるものなんです。そしてそれは、自分自身の中にもあるんですよ。その両者が共鳴しているんですよ。」

たとえば、溝口肇から解き放たれた旋律を自分の世界観で咀嚼する。と、心が波立つ。その瞬間、作者の思いと自分の思いが絡み合っていることに気づく。その感覚は、忘れていた大切なことを思い出したり、自分の胸の奥深く宿る何かを見出すきっかけになるかもしれない。それは実にスリリングな体験だ。だからなのだろう、時代や民族にかかわらず、人が太古の昔より途切れることなく音楽を求めてきたのは。

人の心に似た京都の奥深さは 難解なパズルのようで面白い

彼もまた、音楽を求め、自身のフロンティアを開拓してきた。その彼に、昨年、新しい仲間が加わった。300年前、イタリア・ナポリに生まれたチェロである。

「アンジェラ、と名付けました。『彼女』は、イタリア人の女の子みたいに明るくて、ちょっとワガママ。天気によって調子が悪くなるので、演奏しながら『どうして、いい音、出してくれないの?』なんて話しながら弾いているんですよ(笑)」。

彼女は今年、初めて日本の冬を過ごした。寒さと乾燥が苦手らしく、体調を壊したそう。それでも春になると

のインスピレーションをもらえるんです。たとえば、少し風が吹いただけで気持ちが変わるんですよ。変化する自然の中で、自分も変化しながら弾く。これは、本当に楽しいものですね。」

京都には、仕事のほかにプライベートで訪れることもある。その時は、憩意にしているエッセイストの麻生圭子さんが、案内役を買ってくれるという。

「先日は、南禅寺の門と一緒に上ってきました。朽ちた木の感じや、みんなが触ってツルツルになっている部分とか、木の質感がすごくよくて、嬉しくなりました。海外にも古い建物はありますが、全部石でできているでしょ。僕は、やっぱり木で造られているものが好きですね。」

そんな建物が集まるからこそ、京都に魅力を感じている。その一方で、プレッシャーを感じることもあるという。ひとりで京都を散策しようとする、どこで何を見たいのか解らなくなるからだ。

「奥が深すぎて、何から手をつけたらいいのか解らないんですよ。でも、それが京都の良さなんですよ。誰でも解るようにしたら、面白みがなくなると思うんです。難しいから面白いんですよ。少しずつ京都を知っていく。それが楽しいんです。それは難しいパズルに挑む面白さと同じですね。」

実相院チャリティコンサートは 京都と観客の幸福のために

京都が孕む奥深さは、時に「よそ者に冷たい」印象を与えるのかもしれない。だが、そんな京都のカラーを守っていくべきだ、と彼は言う。

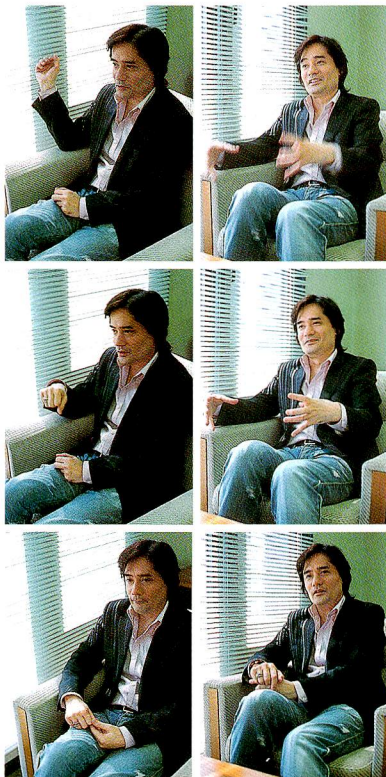
「ワルジャワによく行くのですが、最近、街がどんどん変わっていつてるんですよ。住民にとっては近代化されて住みやすくなるんですけど、デパートがパリみたいなようになっていくのを外から見てみると、すごく寂しい気持ち

The Real Face

取材・文/井本旬子 撮影/エディオオムラ
取材協力/α-station

みぞぐち・はじめ

溝口肇



「5月に、実相院を建て替えるためのチャリティコンサート(『音のしずく』心の調べコンサート第一章)を、麻生圭子さんと一緒にさせていただいたんです。チャリティは、自己満足かもしれない。でも、このコンサート

喜びを与え、沸くエネルギーが 自身の幸せの糧となる

彼はあと300年は生きるであろうアンジェラを、次世代に残そうと考えられている。するといつも「戦争をしては



ていた。そして音色を奏でるだけでなく、CMや映画、舞台音楽なども手がけるようになった。今年でデビュー20周年。節目の年を迎え、何か期するものがあるのだろうか。その問いに対して彼は、「時間ばかりが過ぎたなあ、と(笑)。実はいつも出発点だと思ってるので、振り返りたくないんですよ。」

回復し、4月に開催された「平安神宮 紅しだれコンサート2006」では、肌寒い夜の野外コンサートにもかかわらず、上機嫌で美しい音色を奏でてくれた。

「この時期、京都で演奏するのは楽しいですね。それに野外は刻一刻と環境が変化するので、そこからたくさん

になりますね。」

歴史を捨て、アイデンティティを捨てた街を見てきた人だからこそ、京都を守ることに大切さが身にしみるのである。そして考えた。「京都のために、自分に何ができるのか」。その第一歩として音楽家が導き出した答えは、実に明快だ。

に来ていただいた方は、次に実相院を訪れた時、ちょっと嬉しいと思うんです。なぜなら、音楽を聴きにきたことが実相院を守ることにつながっているからです。それをきっかけに、様々なことに対して意識が広がっていくと、いいですね。」

溝口肇 (みぞぐち・はじめ)

東京都出身。東京芸大在学中に多重録音により独自の作品を制作。'86年に「ハーフィンチデザート」でソロデビュー、日本たばこ「ピースライト」のCM出演とともに脚光を浴びる。以来、TV朝日「世界の車窓から」のテーマ曲やCM音楽製作、チェコフィル、ワルシャワフィルといったオーケストラとのセッションによるレコーディングをこなすなど、活動範囲は多岐に渡る。来る9月にデビュー20周年記念アルバムの発売が予定されている。

『溝口肇コンサートツアー2006』日時：平成18年11月17日(金) 会場：神戸・松方ホール

【問い合わせ】松方ホール・チケットセンター 078-362-7191

いけない」という考えに帰結するといふ。自分にとって大切なものを守りたいという、傍から見れば小さな願いも、少しずつ行動を重ねていけば、大きなことにつながっていく。そしてそれは、自身の喜びや幸せの糧となる。

「さんざん言い尽くされていますが、『癒し』は受動的なものではなく、能動的なものだと思います。癒しの音楽を聴くだけではダメなんです。その後、自分が動いてエネルギーとなって、初めて癒されるんですよ。」

確かにそうかもしれない。随分前の話だが、『癒す』という他動詞は、『癒える』という自動詞から派生した単語という説を聞いたことがある。『癒す』という言葉よりも前に『癒える』が基本形として存在していた、つまり傷というものは、本来『癒される』ものではなく『癒える』ものだった、という見解だ。

彼は続ける。「人が喜びを感じるのには、何かを受け取った時ではなく、何かをあげた時だと思っんです」。そして幸せもまた、人に与えられるものではなく、人を幸せにすることで初めて得られるものなのだ、と。

何のてらいもなく語り、そこに説得力を感じるのには、与えることの素晴らしさを知っているからに違いない。そのひとつが「京都を守りたい」という思いを込めたチャリティコンサートとは、我々にとって実に嬉しい話ではないか。

では京都に住まう者は、京都を守るために何をすべきなのだろうか？ 彼なら「自分にできることからすればいい」と微笑むだろう。彼が最も身近な音楽を手段にしたように。

何も構えることはない。まずは、朝起きて溝口肇を聴く。そして、その音楽に秘められたメッセージに自身の心を絡ませ、紐解く。そうすれば、進むべき道が目の前にあることに、きっと、気づくはずだ。